

れには勢ひ『必要そのもの』『適切そのもの』主義が或は最後の勝利を占むるこゝ、彼のル・アーヴル港の如くなるかも知れない。但し貧弱なる我國として、苟くも築港工事を起す以上、何の土地でもその計畫には飽迄長き將來を見通した大きな彈力性に富むだ所の『適切そのもの』主義でこそありたい。

一體『築港』と言ふ文字の響きがわるい。明治初年に政府が着手した彼の野蒜、三國の二築港が失敗に終つて以來、『築港』の文字には政府すらが寧ろ恐れを爲した。従つて船舶の増加、船型の改良、船體の擴大誰が目にもその著しきを加へ來つた今日に及むでも、まだ『築港』の響きが悪くて、今だに徳川氏時代

の港をそのまゝ、何の改善をだも遂げざる裸港が我國の至る所に横はつて居るが、『適切そのもの』本位の『港灣改良』くらひならば、それはさまでの困難なく、到る所の商工都市で市と縣との奮發次第で隨分出來さうなものではないか。またそれをしも出來し得ないで大正の今時にまで徳川時代の裸港をそのまゝでは、その市民の意氣も面白も邃に如何である。但し築港さへ出來れば、すぐ一足飛びにその都市が大發展を來すものかの如くに夢想し宣傳するに至つては、之れも亦厄介千萬であらうよ。築港は決して築港自體だけで以て萬能力を發揮し能ふものでないから。

### 趣味の燕洋博士

直木燕洋博士は復興局長官と云ふウルサイ役目を投げ出して博士本來の趣味生活に入り、目下神戸と東京で月半々位の生活をしてをられます。時々地方へ出かけては  
薰風や船して海を相しけり  
と其オリジナリチーを發揮し、近頃は又佐々木信綱博士の門に入り短歌の創作を初められたさうです。

一度聽き度いと思つてゐた觀世流の謡曲は近頃サツバリやらないこの事、海港工事に關する説を叩くと、相變らず博士一流の論が出ます。

本論の題命は編輯部で勝手に作りました。博士の本意でないかも知れませんから御諒承願ひます。

